

幼児の向社会性と親の共感経験との関連

首藤 敏元*

キーワード：共感経験、向社会的行動、家族関係、幼児

本研究は、子の気持ちに対する母親と父親の共感経験、および夫婦間での互いの気持ちに対する共感経験を測定した。そして、幼児期の子どもの向社会性として、物語場面での共感反応、および自由遊び場面での向社会的/攻撃的行動を観察し、両者の関連性を検討した。その結果、幼児の向社会性は親の共感経験と部分的に関連していた。その関連性は、子どもの性別と共感経験の側面によって異なり、複雑であることが示された。一方、夫婦間の共感経験が幼児の向社会性と有意に関連しており、家族関係のダイナミズムや家族の発達 of 相互性に関わる知見が見出された。

I 問題と目的

本研究は、家族間での気持ちの交流経験を幼児の向社会的発達の主要な環境とみなし、親子間と夫婦間での共感経験と幼児の共感性および向社会的/攻撃的行動との関連性を検討する。

幼児期の子どもは、自己意識と対人関係の発達とともに、共感、罪障感、正義感などの複雑な情動を表出するようになる (Saarni, 1990)。このような社会的情動は子どもが人との関係の中で社会化し個性化していく上で重要な要素となる。近年、青少年の非行や規範意識の低下、心理的な問題が顕著になり、乳幼児期からの基本的情動の形成が重要視されてきた。特に、相手の心情を想像し自己の行動を制御しようとする動機づけと能力、相手の気持ちを共有し相手を思いやる向社会性、人の身体や心を傷つけてはいけないといった基本的な道徳観、利己的な行動を抑制する公正観を幼児期から育成すること

の重要性がさまざまな形で強調されている。

向社会性とは、相手の気持ちを理解、共有し (共感)、自分よりも相手を優先させようとする心情や行動である。向社会的行動には、相手の心情や要求に影響され、自分の欲求を抑え相手の利益になるように振舞う自己抑制的な側面と、相手の要求を優先させて相手の利益につながる行動を積極的に表現しようとする自己主張的な側面とがある (首藤, 1995)。向社会的行動は無意識的なものではなく、自己によって意識的に制御された行動である。

向社会性の発達には幼少期に親から受容的で^{*} 応答的な養育を受ける愛着経験と、自分の立場とは異なる他者の心情を代理的に経験することが必要であると指摘されてきた (Eisenberg, 1998)。しかし、これまでの研究は養育者として母親のみに焦点を当てており (例えば、渡辺・瀧口, 1986)、子どもの向社会性の発達を母子関係の中でのみ問題にしてきたといえよう。子どもは家族関係という多様な人間関係の中で発達する。そこには、親子の関係だけでなく、夫婦

* 埼玉大学教育学部乳幼児教育講座

関係やきょうだい関係も存在する。家族をひとつのシステムと考えると、親子関係や夫婦関係はサブシステムであり、相互に影響を与え合っ
て家族関係を構成しているとみなすことができる(亀口、1992)。家族をシステムととらえる観点からは、母親の育児不安やストレス、養育態度は、母親自身の問題ではなく、父親(夫)、祖父母を含めた家庭の問題ということが
できる(柏木、1998)。

世代を問わず、現代の夫婦関係には夫の意識・態度の変容が求められている。夫の家事・育児能力(スキル)を高めることも変容のひとつであるが、「夫に洗濯や掃除を手伝ってと言っているのではない。やさしい一言がほしい。」という言葉に代表されるように、妻の内面(意識や気持ち)への気づきと、共感やいたわりといった妻への思いやりが求められているといえる。実際に、夫から心理的に支えられていると意識する妻は、育児ストレスが低く、母子間の愛着も安定する傾向にある(大日向、1991; 佐藤・菅原・戸田・島・北村、1994; 佐々木、1996)。従来の研究は、主に妻から見た夫婦関係を調査してきた。相手に対する思いやりは妻の側にも必要とされることは言うまでもない。本研究は、夫と妻の両方から見た夫婦間での気持ちの交流、母親と父親から見た子どもとの気持ちの交流を家族の共感経験と呼び、これと幼児の向
社会性との関係を調査する。

共感とは、円滑な対人行動を促し、他者理解を深め、関係の質を高める重要な要因であることが示されている(澤田、1992)。夫婦間の共感とは夫婦関係の質を高め、家族システムのダイナミズムを通して、家族の成長に寄与すると考えられる。家族システムの観点に立つと、夫婦関係と親子関係は相互に影響を与えあい、親も子どもも家族という文脈の中で発達をとげる。角田(1994、1998)は、共感が単に気持ちの上で一体となる状態ではなく、また受容でも同情でもないことを強調し、体験と認識の両面を備えた能動的な経験であると考
えている。そして、彼は

共感が互いに個性を持った者同士による個別性の認識を土台にして体験されるものであるため、深い他者理解へと至る過程には、相手の気持ちを理解できたという共有経験と同時に、理解できないという分離経験も重要であると主張している。彼は共有経験と共有不全経験の低位尺度から成る共感経験尺度を作成し、その信頼性と妥当性を確認している。角田の理論と尺度はカウンセリング場面での共感を対象に構築された。家族はそれぞれ違った個性を持った者の集団であり、ひとつの家族として機能していくためには互いの理解が不可欠となる。これらの点から、角田による共感経験の尺度は家族の共感経験を測定する道具として利用可能であると
考えられる。

首藤(1977a、b、2000b)は、角田(1994)の共感経験尺度に基づき、夫婦間と親子間(母子間と父子間)の共感経験を測定する尺度を作成し、その妥当性と信頼性を検討した。親子間であっても夫婦間であっても、また母(妻)から見ても父(夫)から見ても、家族の共感経験は「共有」と「分離」の2つの側面から構成されていることが分かった。「共有」は相手の気持ちへ積極的に関心を示したり、それを気づかたり、苦しみや喜びを共有したりする側面であり、「分離」は相手の気持ちを分
かろうとしてもなかなか理解できなかつたり、相手の気持ちを気づかうことを苦痛に感じたりする側面である。「共有」が相手との一体感をつくるのに対し、「分離」は自分と相手とのズレや個性の違いの意識を促すことになる。この「共有」と「分離」の側面が、親子と夫婦の両方で、さらに母親(妻)と父親(夫)の両方で見出された。角田(1998)の指摘するとおり、個性を持った者同士の共感には心情の共有と個別性の認識の両方が存在しているといえる。

家族の共感経験尺度は、内部一貫性とテスト-再テスト法のいずれにおいても信頼性の高い尺度であることが確認された(首藤、2000b)。また、家族の感情交流は夫婦の関係に対する態度、

育児場面、子どもの愛着場面などの家庭生活の様々な局面と関連しており、尺度が内容的に妥当であることが確認された(首藤、2000b)。親子間と夫婦間の共感経験には妻の就業による差異はほとんど認められないこと、親子の共有経験は母の方が高く、親子と夫婦間での分離経験は父(夫)の方が高いこと、母子間の共感経験には両親家庭と母子家庭の差異は認められないことも見出されている(首藤、1999、2000a、2001)(資料1)。

本研究は、首藤(1997a、b、1999、2000a、b、2001)に従い、子を中心とした家族関係を夫婦関係と親子関係に分け、家族関係を相手の心理的状態への積極的関心とその共有、つまり共感関係からとらえ、子の気持ちに対する母親の共感と父親の共感、および夫婦間での互いの気持ちに対する共感を測定する。そして、物語場面での共感反応、遊び場面での向社会的行動・攻撃的行動との関連性を検討し、家族のダイナミズム、家族の発達の相互性に関する知見を広げることが目的とする。

II 方法

1 調査協力者

さいたま市内の公立保育所4園の保護者178名(母親107名、父親71名)とさいたま市内の私立幼稚園1園の保護者239名(母親132名、父親107名)が調査に協力した。回収率は保育所57%、幼稚園62%であった。保育所の場合、月齢42ヶ月以上の幼児を対象に配布し、幼保で幼児の月齢に差が出ないように配慮した。回収のあった家庭の幼児の平均月齢は保育所で62ヶ月、幼稚園で63ヶ月、幼保による性別の分布は同質であった。母親の平均年齢は保育所では34歳2ヶ月、幼稚園では34歳0ヶ月、父親の平均年齢は保育所では36歳5ヶ月、幼稚園では36歳4ヶ月、平均結婚年数は保育所9.2年、幼稚園8.3年であった。

幼児の共感性の調査は上記の幼稚園の保護者

から個別調査の同意の得られた年中児と年長児70名(男女同数、平均年齢は6歳4ヶ月)を対象に行われた。向社会的行動の観察は上記保育所の5・6歳児クラスの中から保護者の同意の得られた72名(平均年齢は5歳10ヶ月)を対象に実施された。

2 調査項目と手続き

(1) 家族(夫婦と子ども)の共感経験

首藤(1997a、1999、2000a、b、2001)は、共感経験が、親子間であっても夫婦間であっても、および母親(妻)から見ても父親(夫)から見ても、共有体験と分離体験という2つの因子から構成されることを見出した。この結果に基づき、親子間での共有体験8項目(「子どもと気持ちがひとつになっていると感じたことがある。」「子どもを叱ったあと、子どもがどんな気持ちになったかを想像したことがある。」「子どもが悲しそうにしている時、なんとかしてあげたくなったことがある。」など)と分離体験5項目(「子どもの気持ちの変化についていけず、子どものことを不思議に感じたことがある。」「子どもが泣いていた時、その気持ちをわかろうとしたが、なぜ泣くほどに悲しいのか理解できなかったことがある。」「子どもが『これはおもしろい』と言葉やしぐさで伝えてきても、自分は興味を持てなかったことがある。」など)の計13項目が親子間共感の項目として用いられた。また、夫婦間での共有体験7項目(「夫(妻)と気持ちがひとつになっていると感じたことがある。」「夫(妻)がとても疲れているのを見た時、なんとかしてあげたくなったことがある。」「夫(妻)がつらそうにしているのを見た時、自分まで苦しくなったことがある。」など)と分離体験5項目(「夫(妻)がつらそうにしていた時、その気持ちを感じとろうとしたが、ピンとこなかったことがある。」「夫(妻)の話聞くのがめんどうになったことがある。」など)の計12項目が夫婦間共感の項目として用いられた。各因子に対応した項目の数は原尺度(首藤、1997)で

表1 物語場面での共感反応の測定手続き (一例)

場面1	紹介	今日は遠足。たーちゃんはとても楽しみにしている。
場面2	状況1	お母さんは、一生懸命お弁当をつくってくれた。たーちゃんは、お母さんのお弁当を食べるのをとても楽しみにしている。
場面3	状況2	公園に行った。いじめっ子の男の子がたーちゃんをいじめ、仲間外れにする。たーちゃんはいじめられても元気で、いじめっ子を追い払ってしまった。
場面4	negative	お昼になって、お弁当を食べようとすると、いじめっ子がやって来てお弁当に砂を入れてしまう。弁当は食べられなくなった。たーちゃんは泣きそうになっていた。
苦痛場面の共感		質問1 主人公の感情理解 質問2 自分の感情
場面5	紹介	そこに、やさしいまことくんがやってきた。
場面6	援助	まことくんは自分のお弁当を半分たーちゃんに分けてあげた。
場面7	positive	たーちゃんは分けてもらったお弁当を楽しく食べた。
喜び場面の共感		質問1 主人公の感情理解 質問2 自分の感情
得点化	苦痛場面と喜び場面の共感の得点化	0点 主人公の感情を理解できない 1点 主人公の感情は理解できるが、それを共有しない 2点 主人公の感情を理解し、それを共有する

の項目数の割合と一致している。回答者は各質問に「全く経験しない」から「いつもある」までの6段階で評定した。

保護者への質問票は幼稚園と保育所を通して家庭に配布された。その際、父親用と母親用の返信切手の貼られた封筒も同封されていた。協力者は回答後、母親用と父親用を別々の封筒に入れ、郵便によって返送した。回答期間は10日であった。この手続きは、協力者のプライバシーを守るためと、保育所・幼稚園に質問票回収の手間をかけないための配慮から行われた。

各尺度の項目の平均値を尺度得点とした。なお、 α 係数は次の通り。母子共感の共有は.83、分離は.78、父子間共感の共有は.79、分離は.73であった。妻から見た夫婦間共感の共有は.86、分離は.78、夫から見た夫婦間共感ではそれぞれ.85と.80であった。

(2) 物語場面での共感反応

首藤(1994)の材料の一部が用いられた。主人公の苦痛と思いやり行動を描いた2種類(「いじわる」と「けが」)の紙芝居を用いた。いずれ

もB4用紙を横長に使用した7枚のカラー図版から構成されていた。物語文はあらかじめテープに録音されていた。テープには場面を説明したナレーションと登場人物の会話、内容に即した効果音とBGMも録音されていた。紙芝居の内容の録音時間はいずれも約4分であった。表1は材料と手続きの一部(「いじわる」)を示している。

調査は幼稚園内の空き教室を利用して、個別に実施された。手続きは次の通り。教示→紙芝居の苦境場面提示(場面1~4)→苦境場面での主人公の感情の質問(場面4)→主人公の苦境に対する幼児自身の感情とその理由→援助場面提示(場面5~7)→援助場面での主人公の感情の質問(場面7)→主人公が助かった場面での幼児自身の感情とその理由→次の紙芝居。2種類の紙芝居の提示順序は1人おきにカウンターバランスされた。得点化は次の通り。0点:主人公の感情の認知不適切、1点:適切な感情認知と感情の共有なし、あるいは素朴な感情の共有(「かわいそう」など)、2点:適切な感情認知と具体

表2 行動観察のカテゴリー

観察カテゴリー	内容	一致率
A 向社会的行動	他の子を気づかったり援助したりする行動	合計 32 件
観点1:内容	1.物・場所・順番の分与 (物を貸す, 場所を譲る, 先にさせてあげるなど)	10件
	2.援助・慰め (やさしい言葉かけ, 転んだ子を起こしてあげるなど)	12件
	3.協力 (手伝うなど)	10件
観点2:自発性	1.自発的	22件
	2.依頼による	10件
B 攻撃行動	乱暴な行為, 他者・集団に害を与える行動	合計 54 件
観点1:内容	1.身体的攻撃 「叩く」「ける」「押しやる」	38件
	2.心理的攻撃 「言葉でのいじめ・攻撃」「隠す(いじわる)」	11件
	3.破壊行動(物に対する攻撃) 「物を壊す」「物を投げる」	5件
観点2:自発性	1.挑発	50件
	2.報復	4件

的な感情の共有。2つの紙芝居での得点を合計し、共感得点とした。

(3) 向社会的行動・攻撃的行動の観察

表2にあるように、「他の子を気づかったり援助したりする行動」を向社会的行動と定義した。大人の手伝いやごっこ遊びの中での向社会的な振る舞いは観察から除外した。向社会的行動が見られた場合、その内容と自発性によって、さらに細かく分類した。本報告では、自発的な向社会的行動のみを分析の対象にする。

攻撃行動については、「乱暴な行為、他者や集団に意図的に被害をもたらす行為」と定義し、大人に向けられた攻撃も観察の対象にした。内容と自発性に依じて、個々の攻撃行動はさらに細かく分類された。本報告では、挑発的な攻撃のみを分析の対象にする。

園での自由活動場面を観察対象とし、園児ごとに30分の観察を2回行った。2回の観察は3日間から7日間の期間をおいて実施した。また、同一の時間帯にならないよう配慮した。観察者はカテゴリーに沿った幼児の行動を逐語記録した。また、各観察とも、観察・評定の信頼性を

確認するために、20名分の幼児については2名の観察者が独立して観察・評定を行った。個々の幼児について、60分あたりの向社会的/攻撃的行動の出現回数を算出し、それを得点とした。

III 結果

1 親の共感経験

親子共感と夫婦共感のいずれにおいても保育所と幼稚園での差は有意でなかった。夫婦のペアが確認された170組の平均値が表3に示されている。*t*検定の結果、親子間と夫婦間での分離経験は父親(夫)の方が有意に強かった。親子間の場合、共有経験は母親の方が有意に強かった。これらの結果は首藤(1997a、b、1999、2000a、b、2001)の知見とも一致している(資料1)。

2 幼児の向社会性

表4に主人公の苦境場面の共感(苦痛)と援助後の喜び場面の共感(喜び)の平均値が示されている。どちらも有意な性差は認められなかった。

表3 共感経験尺度の平均値

n=170(組)		母親(妻)		父親(夫)	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
親子共感	共有	4.92	0.54	4.71	0.53
	分離	3.31	0.79	3.35	0.76
夫婦共感	共有	4.36	0.74	4.34	0.66
	分離	3.26	0.85	3.36	0.87

表4 幼児の向社会性に関する指標の平均値と標準偏差

		人数	平均値	標準偏差	性差
共感	苦痛	70	2.56	0.67	n.s.
	喜び	70	2.17	0.48	n.s.
	向社会的行動	72	0.22	0.48	n.s.
	攻撃的行動	72	0.33	0.67	男>女

72名全員の観察をとおして、自発的な向社会的行動は22件、挑発的な攻撃行動は50件認められた。一人当60分での出現頻度の平均は表4にあるように、0.22回と0.33回であった。向社会的行動には有意な性差は認められない。一方、男子は女子よりも有意に多く攻撃的行動を行っていた。女子の攻撃的行動の頻度は極端に低いため、次の親の共感経験との関連性に関する分析では用いられなかった。

3 親の共感経験と幼児の向社会性との相関

表5は、幼児の向社会性に関する指標と親の共感経験に関する尺度得点との積率相関係数をまとめている。女子の共感的苦痛は母子共感とは有意に相関していなかった。一方、妻から見た夫婦共感での共有とプラス($r=.332$)に、その分離の側面とマイナス($r=-.510$)に有意に相関していた。また、父子共感の共有とプラス($r=.544$)に有意な相関を示していた。

女子の共感的喜びも母子共感とは有意な相関を示さなかった。一方、妻から見た夫婦共感の分離の側面とマイナス($r=-.545$)に有意な相関を示していた。興味深いことに、父子共感の

共有および分離とプラスに有意な相関を示した(それぞれ $r=.417$ 、 $r=.452$)。

男子の共感的苦痛は母子共感の分離、および妻から見た夫婦共感の分離とマイナスに有意な相関を示していた(それぞれ $r=-.426$ 、 $r=-.409$)。父子共感との間には有意な相関は認められない。一方、夫から見た夫婦共感の分離とプラスに有意な相関を示した($r=.427$)。共感的喜びは母子共感、妻から見た夫婦共感、および父子共感とは有意な相関を示さなかった。一方、夫から見た夫婦共感の共有とはプラスの有意な相関($r=.414$)が認められた。

女子の向社会的行動は母子共感の分離とマイナス($r=-.441$)に、父子共感の共有とプラス($r=.431$)に有意な相関を示した。男子の向社会的行動は母子共感の分離($r=-.521$)と妻から見た夫婦共感の分離($r=-.420$)とマイナスに有意な相関を示した。また、夫から見た夫婦共感の共有とプラスに有意に相関($r=.359$)していた。

男子の攻撃的行動は母子共感の分離($r=.358$)および妻から見た夫婦共感の分離($r=.402$)とプラスに有意な相関を示した。

表5 親の共感経験と子どもの向社会性との相関係数

		母子共感		妻から見た夫婦共感	
		共有	分離	共有	分離
女子	共感的苦痛	.274	-.102	.332 *	-.510 **
	共感的喜び	.038	.172	.261	-.545 **
男子	共感的苦痛	-.235	-.426 *	-.059	-.409 *
	共感的喜び	-.216	.089	.254	-.282
		父子共感		夫から見た夫婦共感	
		共有	分離	共有	分離
女子	共感的苦痛	.544 **	.201	.305	-.228
	共感的喜び	.417 *	.452 *	.297	-.013
男子	共感的苦痛	.156	.255	.303	.427 *
	共感的喜び	.019	-.255	.414 *	-.314
		母子共感		妻から見た夫婦共感	
		共有	分離	共有	分離
女子	向社会的行動	.165	-.441 *	.203	-.336
男子	向社会的行動	.014	-.521 **	.018	-.420 **
	攻撃的行動	.076	.358 *	-.106	.402 *
		父子共感		夫から見た夫婦共感	
		共有	分離	共有	分離
女子	向社会的行動	.431 *	-.041	-.321	-.233
男子	向社会的行動	-.097	.053	.359 *	-.171
	攻撃的行動	-.017	.124	-.136	.297

* $p < .05$ ** $p < .01$

IV 考察

本研究は、首藤(1997a、b、1999、2000a、b、2001)に従い、親の共感経験を夫婦間と親子間とに分け、子の気持ちに対する母親の共感と父親の共感経験、および夫婦間での互いの気持ちに対する共感経験を測定した。そして、幼児期の子どもの向社会性として、物語場面での共感反応、および遊び場面での向社会的/攻撃的行動を観察し、両者の関連性を検討した。

親の共感経験は子どもの向社会性と部分的に関連していた。親子間においても夫婦間においても、子どもの共感および向社会的行動は共有の側面とプラスに、分離の側面とマイナスに相

関する傾向が認められた。男子の攻撃的行動も意味的には同様の傾向を示した。ただし、女子の共感的喜びは母子共感の分離とプラスの有意な相関を示しており、親の共感経験と子どもの向社会性との関連性は複雑であることも示唆された。

親子と夫婦の共感経験は子どもの性によって異なって作用する可能性も示唆された。つまり、女子の場合、母親の共感経験に関する8つの相関係数のうち3つが有意であった。その3つとも夫婦共感であった。父親の共感経験に関する相関係数では、8つのうち3つが有意になり、それらはすべて父子共感と関係したものであった。幼児期の女子は、母親の父親への関わり方や意

識の持ち方とをとして、自己の共感性を発達させるのかもしれない。また、父親と自分との関係をととして、共感性を発達させるのかもしれない。男子の場合、母親と父親の各8つの共感経験のうちそれぞれ2つずつが有意となった。有意になった父親の共感経験は2つとも夫婦間の共感であり、男子の共感性の発達にとって、父親の母親への関わり方や意識の持ち方が重要であることを示唆している。

男女の結果を整理すると、子どもは同性の親の異性の親への関係の持ち方とをとして共感性を発達させるのかもしれない。この解釈の妥当性を支持する知見も得られている。首藤(1999)は、保育士および教師から見た幼児の対人行動(協調的、主張的、利己的)と、家族共感およびしつけの態度との関係を検討した。その結果、男子の協調的な対人行動には母子間の共感経験が、女子の協調性には父子間の共感経験が、それぞれ有意に関連していた。今後、この仮説を検証する必要があるだろう。

親子間の共感経験だけでなく、夫婦間の共感経験も子どもの向社会性と関連していた。首藤(1997a、2000b)は、親子間共感と夫婦間共感の関連を検討した結果、母親(妻)と父親(夫)のいずれにおいても、親子間と夫婦間の共感には有意に相関していることが示された。また、親子間においても夫婦間においても、母親(妻)と父親(夫)の共感経験は弱いながらも有意な関係を示していた。これらの結果は、家庭の中にある一貫した感情交流のパターンのあることを示唆している。さらに、家族の共感経験尺度の得点を因子分析した結果、母親(妻)と父親(夫)の意識に共通した因子が抽出された。この因子が見出されたことは、家庭の中に空気のように存在する感情的な雰囲気もしくは風土が存在し、それは本研究の共感経験尺度からとらえ得ることを示唆している。今後、家族の共感経験のパターンから、家族関係の質を測定し分類する研究が必要になるだろう。

人は結婚してからも、親になってからも心理

的に発達を続けている。首藤(1997a、b、2000)は母親(妻)と父親(夫)のいずれにおいても、親になってからの自己の成長感には、夫婦間の共感が有意に影響しており、その程度は妻の方が強いことを見出した。興味深いことに、夫の成長感には父子間の共感経験が有意に影響するのに対し、妻の成長感には夫婦間の共感経験しか影響しないことが見出された。Erikson(1982)によれば、成人期の発達課題は「世話」である。子どもを持つ夫婦の場合、子どもの発達課題の達成にとっても、自分自身の課題の達成にとっても、育児や家事にかかわる仕事を分担し、さまざまな体験や感情を共有する親密な夫婦関係が必要になる。Erikson(1982)は「家族全員が赤ん坊を統制し、育てると言われるが、逆に赤ん坊が家族全員を統制し、育てると言い方もまた正しい。家族というものは、赤ん坊に育てられることによってのみ赤ん坊を育てることができる。」と表現している。つまり、人は成長することによってのみ人を成長させることができるのである。家族の発達の相互性という観点から、家族の共感経験と子どもの向社会性の発達について更なる研究が求められる。

引用文献

- Erikson, E.H. 1982 *The life cycle complete*. NY: W.W. Norton & Company. 村瀬孝雄・近藤邦夫(訳) 1989 ライフサイクル、その完結みすず書房
- Eisenberg, N. and Fabes, R.A. 1998 Prosocial Development. In W. Damon & N. Eisenberg (Eds.), *Handbook of Psychology 5th ed., Vol. 3: Social, Emotional, and Personality Development*. New York: Wiley. 701-778.
- 亀口憲治 1992 家族システムの心理学 北大路書房
- 柏木恵子 1998 社会変動と家族発達 柏木恵子(編)結婚・家族の心理学 ミネルヴァ書房、5-50.
- 大日向雅美 1991 親としての発達 児童心理学の進歩、Vol. 30、金子書房、153-179.

- Saarni, C. 1990 Emotional competence: How emotions and relationships become integrated. In R.A. Thompson (Ed.), *Socioemotional development: Nebraska symposium on motivation*, 1988. Lincoln, N.E.: University of Nebraska Press. pp.115-182.
- 佐々木保行 1996 父親の発達研究と家族システム: 生涯発達心理学的アプローチ 教育心理学年報、第35集、137-146.
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島 悟・北村俊則 1994 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連 心理学研究、64、409-416.
- 澤田瑞也 1992 共感の心理学: そのメカニズムと発達 世界思想社
- 首藤敏元 1994 幼児・児童の愛他行動を規定する共感と感情予期の役割 風間書房
- 首藤敏元 1995 幼児の向社会的行動と自己主張—自己抑制—発達臨床心理学研究(筑波大学心理学系)、7、77-86.
- 首藤敏元 1997a 乳幼児の思いやり行動と家族の共感関係の検討 厚生省心身障害研究 効果的な親子のメンタルケアに関する研究(平成8年度研究報告書)、255-261.
- 首藤敏元 1997b 現代家族と子ども 夫婦関係と子ども ペリネイタルケア(メディカ出版)、16巻9号(通巻第199号)、37-42.
- 首藤敏元 1999 思いやりと正義感の発達を規定する家族要因の研究 平成10年度厚生科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)報告書 研究代表: 清水凡生 幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究、131-143.
- 首藤敏元 2000a 正義感の発達を規定する家族要因の研究 平成11年度厚生科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)報告書 研究代表: 清水凡生 幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究、120-128.
- 首藤敏元 2000b 家族の共感関係と家族の成長に関する研究 埼玉大学紀要教育学部(教育科学)、第49巻2号、63-76.
- 首藤敏元 2001 正義感の発達を規定する家族要因の研究 平成12年度厚生科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)報告書 研究代: 清水凡生 幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究、175-184.
- 角田 豊 1994 共感経験尺度改訂版(EESR)の作成と共感性の類型化の試み 教育心理学研究、42、193-200.
- 角田 豊 1998 共感体験とカウンセリング: 共感できない体験をどうとらえ直すか 福村出版
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ 1986 幼児の共感と母親の共感との関連 教育心理学研究、31、324-331.

(2006年3月28日提出)

(2006年4月11日受理)

資料1 両親家庭における家族共感の平均値と標準偏差

首藤 (2001)

	母子共感-共有			父子共感-共有			父母間の差 (分散分析F値)
	人数	平均	標準偏差	人数	平均	標準偏差	
幼稚園	446	4.85	0.57	446	4.60	0.63	72.61
保育園	348	4.82	0.62	348	4.58	0.66	
全体	794	4.83	0.59	794	4.59	0.65	
	母子共感-分離			父子共感-分離			父母間の差 (分散分析F値)
	人数	平均	標準偏差*	人数	平均	標準偏差	
幼稚園	446	3.35	0.79	446	3.35	0.77	4.48
保育園	348	3.29	0.75	348	3.42	0.72	
全体	794	3.32	0.77	794	3.38	0.75	
	妻から見た夫婦共感-共有			夫から見た夫婦共感-共有			父母間の差 (分散分析F値)
	人数	平均	標準偏差	人数	平均	標準偏差	
幼稚園	446	4.22	0.72	446	4.27	0.72	0.9
保育園	348	4.19	0.81	348	4.22	0.77	
全体	794	4.20	0.76	794	4.24	0.74	
	妻から見た夫婦共感-分離			夫から見た夫婦共感-分離			父母間の差 (分散分析F値)
	人数	平均	標準偏差	人数	平均	標準偏差	
幼稚園	446	3.22	0.80	446	3.41	0.80	26.49
保育園	348	3.32	0.79	348	3.50	0.84	
全体	794	3.27	0.79	794	3.45	0.82	

注1 幼稚園と保育園の差異はすべて有意でない。

注2 得点は1から6の間に分布する。

* $p < .05$ ** $p < .01$

Relationships between Young Children's Prosocial Development and Parents' Empathic Experience for their Family

Toshimoto SHUTO

Keywords: empathic experience, prosocial behavior, family relationships, young children

The present study examined the relations of parents' empathic experience to their children's prosocial development. One hundred-seventy mothers and fathers were assessed their empathic experience for their child and for other spouse, and seventy one preschool children's empathic response for story character and prosocial and aggressive behavior at free play session were evaluated. The findings revealed that children's prosocial development partly related to their parents' empathic experience and those relations varied according to combination of the sex between parent and child, and the kind of empathic experience. The findings that parents' empathic experience for other spouse was significantly correlated their child's empathic response and prosocial behavior suggested the dynamism of the family relations and the mutual development among family.

— 131 —